展 望

文明動態学研究所第１回特別展
津島から世界へ、世界から津島へ

趣旨説明

松本 直子
（RIDC）

皆さま、こんにちは。本日は、お越しいただきまして、どうもありがとうございます。文明動態学研究所所長の松本と申します。

今回の展示（「津島から世界へ、世界から津島へ」2023年２月10日～３月19日、岡山シティミュージアム）は、文明動態学研究所の第１回特別展ということで開催してまいりました。展示会の最後ではありますが、文明動態学とはそもそも何なのだとお思いの方も多いと思いますので。今日は、そのあたりをちょっとお話しさせていただきたいと思います。

文明動態学研究所は岡山大学に設置された最初の人文社会科学系の学問を中心とする研究所です。岡山大学には、他にも資源植物科学研究所、惑星物質研究所、異分野基礎科学研究所という理系の研究所がありますが、人文社会科学系の研究所とは、2021年度に初めてできたわけです。

人文社会系の学問については、しばらく前に文系の学問はあまり要らないとか、役に立たないというふうな政治家の発言があって、ちょっと炎上したことがありました。直接役に立ちそうな理系の学問に比べると、文学とか、歴史学とか、哲学といった文系の学問は、どちらかというと趣味のようなもので、あまり実利的ではない、社会の役に立つものではないという認識があるような気がします。

私は、実際はそうではないと思っています。社会を本当に動かす力というのは、実は理系の技術的な変化だけではありません。ものの考え方、人間というものをどう捉えるのか。社会というものをどう捉えるのか、ということが、非常に強い力を持っていると思っています。

今回の展示でも、津島の歴史の最後で、今の岡山大学があるところは軍隊の拠点であったことを示していますが、日本という国が戦争に動いていくときにも、やはり思想のあり方が、とても強い力を持っていたわけです。だからこそ、権力者は人文科学的な研究を統制しようとすることがあります。

現代社会には、今ウクライナで続いている戦争、貧困や男女の格差、環境破壊など、さまざまな問題があります。その根本的な解決方法を探るには、どうしてそのような課題が生まれてきたのか、その根本的なところを問い直す必要があります。そこから解決法を考えなければ、付け焼き刃的な、絆創膏を貼りまくるようなことでは、やはり根本的な解決に至ることはできないでしょう。

文明動態学研究所には、研究部門と文化遺産マネジメント部門があります（図１）。研究部門には３つの研究コアがあります。数万年、数千年という長期的な視点と分野融合的な新しい研究手法で文明動態を考える文明基礎科学研究コア、数百年、数十年という歴史的視点で社会がどう変わっていくかを考える社会動態学研究コア。それから日本社会の縮図としての瀬戸内地域に焦点をあてて、経済学、社会学など、多角的に地域社会を考える地域動態学研究コアです。歴史学、考古学、人類学などが中心となっていますが、人文社会科学の中でもいろいろな分野をつないで、さらに理科学的な研究者とも連携をして研究を進めていこうと思っています。

文化遺産マネジメント部門は、今回の展示の第一部でとりあげた津島岡大遺跡の調査に長く携わってきた岡山大学の埋蔵文化財調査研究センターが研究所に組み込まれたものです。地域の歴史をしっかりと見据えていくことは、研究の基盤としてとても重要なので、大学構内遺跡の調査、またその成果を今回の展示などを通して、皆さまに広く発信していくことを、両輪でやっていこうと考えております。

そもそも「文明」というのはなんだと、皆さんは思われるでしょうか。文明と似た言葉として、「文化」というのがあります。この二つは、同じような意味で使われることもあります。人間社会で文化のない社会はありません。人

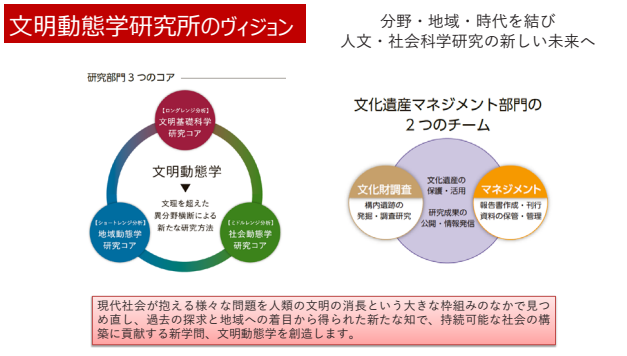


図１岡山大学文明動態学研究所の構成とミッション

間は、本能だけで生きていくことができませんので。必ず、生まれたあとで、その社会にあるさまざまな知識や技術だとか、そういうものを受け継いでいくことで生きていくわけです。それが文化です。

なので、全ての人間集団が文化を持っています。その中で、文字とか、都市とか、国家とか、法律とか、社会的な身分の違いとか、あるいは発達した芸術のようなものを発達させた社会があって、それが文明なのだと言われることもあります。未開社会の中から発展した社会が出てくるのだ、というふうな社会進化論的な枠組みで、こちらが進んでいて、あちらは劣っているというふうな、差別的な意味で使われてきた歴史もあります。

また一方で、物質的、技術的なものが文明で、価値観や世界観といった精神的なものが文化だという使い分けがされることもあります。研究者の学派など、人によってさまざまに定義をされてきているわけですけれども。やはり、文化という私たち共通の、人間の特性をベースにして、ある時期から文明的なものが現われてくるわけです。なので、その文明とはいったい何なのか。これがでてくることで、何が私たち人間に起きたのかというところを、そのダイナミックなメカニズムを理解しようというのが、文明動態学です。

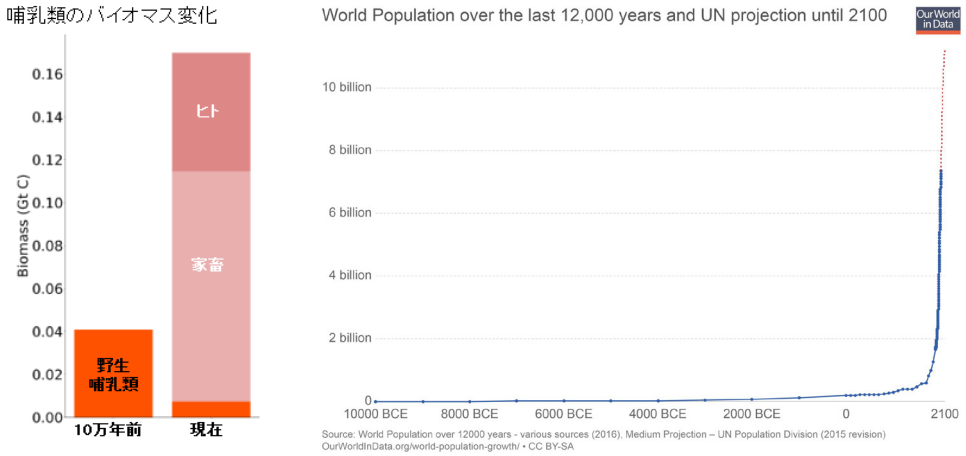
考古学や歴史学だけでは、さまざまな要因が絡み合っているところがよく分かりませんので、必然的にさまざまな分野で連携して研究をしないといけないということになります。その、さまざまな分野の連携ができるプラットフォームとして、文明動態学研究所は活動していこうと思っているわけです。

例えば、私たちの世界は非常に大きく変わってきています。これは人口の増加を表わしたグラフです（図２）。古いところはもちろん推定ですが、現在世界人口は 70 億人を超えています。しかし、紀元前１万年ぐらいまでは、とても少ないのですね。人間は、今でこそ、地球上で非常に多数を占めていますけれども、その最初の歩みは非常にゆっくりしたものです。

これがしかし、ある時点から拡大の方向に向かっていきます。そしてここ数百年の爆発的な人口増加に至ります。10 万年前は、地球上にいる哺乳類にはほぼ野生動物でしたが、今は野生の哺乳類は非常に少なくなっていて、その代わりにヒトが飼っている家畜とヒトが大多数を占めています。こんなに地球上の様相が、大きく変わってきているわけです。

これまでの気候変動をみると、数万年間続いた氷期の後、１万 4000 年前ぐらいにちょっと温かくなり、またちょっと寒くなり、その後完全に氷期が終わって、現在まで後氷期といわれる温かい時期が続いています。こういった地球規模の気候変動と、人類の文明の展開は密接にリンクしています。いわゆる文明というものが形成されるのは、氷期が終わったあとです。

日本の場合も、氷期の間は旧石器時代で、基本的に小さな規模の集団で、遊動しながら野生の動物や植物を採って生きていました。これが、本来人類が何万年にもわたって続けてきた生き方でした。氷期が終わっても、日本の場合



Yinon M. Bar-On, Rob Phillips, and Ron Miloa（2018）
The biomass distribution on Earth, appendix

図２ 人口増加と哺乳類のバイオマスの変化

はすぐに農耕社会には移行せずに、定住的だけれども狩猟採集ベースの縄文時代がかなり長く続きました。しかし、世界のいろいろなところで、このころから農耕牧畜が始まってきて、その後文字や、国家、都市が生まれてきます。

人間が他の動物と大きく違うのは、自分たちが住む環境を大きくつくり変えていくところです。旧石器時代のヒトたちは、洞窟や岩陰のような自然のシェルターを利用して暮らしていました。それが、だんだんと同じところに長く住むようになると、住居をつくるようになる。さらに農耕が発達して人口が増えてくると、人口が密集する都市をつくるようになる。その延長上が、今の私たちが住んでいる現代社会になるわけです。

もちろん同じ人間なので、どんな環境にいても基本的な認知能力や身体能力は同じはずです。ただし、人間は、先ほども言ったように、常に文化で生活をします。生まれ持った心、体と能力だけでは生きていけませんので、文化をつくり出し、それを継承発展させていくわけです。文化と一体になって生きていきますので、考え方や行動パターンなどはかなり大きく変わってきていると言わざるを得ません。なので、最初の文明の形成、つまりある種の開発的、発展的な方向性というものがどのようにして出てくるのかが重要です。それによって、私たちはもちろん大きな恩恵を受けているわけですけれども、そこから出てくるさまざまな課題もあります。その過程を詳細に見ていきたいと思っています。

文明というと、これまでは世界四大文明というものを学校などで習ってきたと思います。エジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明、黄河文明です。大河の近くで農耕が発達し、それで文明ができると言われてきました。私たちが持っている文明観は、このようにアフリカからユーラシア大陸にかけて生まれた文明のイメージがベースになって形成されています。肥沃な土地があって、水があって、農耕ができて、食料をたくさん生産して、人口が増えて、それで社会が発達したというものです。

実は、この四大文明論というのは、もう古いと言われています。アメリカ大陸にも、メソアメリカ文明、アンデス文明などがあるからです。これらの諸文明を比べて見ると、もちろん共通しているところもあるのですが、やはりかなり違うところもあるのです。なので、そのような世界的な比較研究をすることで、ヒトが本来持っている、文明を生み出す力、あるいは傾向のようなものと、環境が違うなかで生まれる多様性というものの両方が見えてくるのではないかと思います。

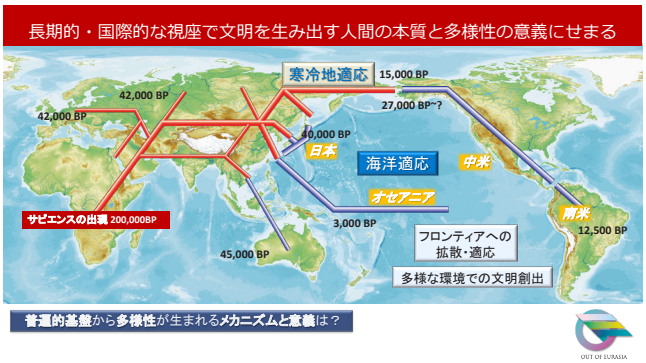


図３　ホモ・サピエンスの誕生と世界への拡散

人類が最初に誕生するのは、アフリカです（図３）。20万年前か、あるいは最近では30万年前までさかのぼるのと言われていますが、今地球上に住んでいる私たち全ての祖先が生まれたのはアフリカです。そのあと、ヒトはアフリカを出て、各地に広がっていきました。ネアンデルタール人（Homo neanderthalensis）やホモ・エレクトス（Homo erectus）など、ホモ・サピエンス（Homo sapiens）以前のヒトも、ユーラシア大陸には広く拡散しました。しかし私たちホモ・サピエンスになって、初めてアメリカ大陸、日本列島、オセアニアの島々まで分布が広がりました。これはなぜかというと、ユーラシア大陸からアメリカ大陸に進出するには、非常に寒冷なところに適応しないといけないわけです。これは、高度な適応能力が必要になります。温かい家や温かい洋服が必須です。さらに、島々に渡るには船を作って海を渡ること、海洋適応が必要です。アメリカ大陸への移動は、これまでは1万5000年前ぐらいにやや温暖化したときに、アラスカの氷河が少し後退して通れるようになったので可能になったと言われていたのですが、最近の研究では、どうやら海伝いに船で行っているのではないかという可能性が指摘されています。やはり海を船で渡る技術、非常に寒いところに適応する技術が、私たちホモ・サピエンスが世界各地に進出し、それまでとはまったく違う気候風土や動植物とともに、独自の文明をつくっていったのではないかということです。

今回の展示では、一つは日本の地域に根差した津島の歴史、もう一つはメソアメリカのものを並べてみました。環境が大きく異なる、そして相互にまったく交流のないところで発展をした文明を比較することで、ヒトがもつ普遍性と多様性が見えてくるのではないかと思っております。

例えば、共通性で言うと、日本でも、それからメソアメリカでも、社会が複雑になってくるなかで、大規模なモニュ

メント的なものをつくります。エジプトのピラミッドも有名ですが、どうもヒトはある状況になるとそういう巨大な建造物をつくるという傾向があるのだなということがわかりますが、その具体的な性格はだいぶ違っています。

古墳は、基本的に王や首長のお墓としてつくるものです。一方メソアメリカのピラミッドは、お墓に特化したものではなく、世代を超えて同じ場所で改築をして、長く使い続けるものも多くあります。こうした違いから見えてくる多様性は、非常に面白いものがあります。

土器も、それぞれの地域で独立して生まれてきます。粘土を焼いたら固くなるのだということは、やはりヒトとその環境の相互作用のなかで何度も発明されるようなものだということがわかります。

一方で、都市についてみると、実は日本では都市の形成が非常に遅いことが分かります。そのあたりに、日本列島における文明形成の特徴を見ることもできます。さらに、戦争というものも、各地域で様々なあり方をします。戦争とは何かということについて、文明動態学研究所が取り組む課題の例としてお話をしたいと思います。

戦争は人間の本性か、ということについては、これまでいろいろな人が、いろいろなことを言ってきています。2016 年にアメリカのオバマ大統領が広島を訪れた際の演説にも「広島だけが際立って戦争を象徴するものではありません。遺物を見れば、暴力的な衝突は人類の歴史が始まったころからあったことがわかります。フリント（flint：打製石器原料）から刃を、木から槍をつくるようになった私たちの初期の祖先は、それらの道具を狩りのためだけでなく、自分たち人類に対しても使ったのです」という言葉がありました。オバマ大統領が言いたかったのは、人間は放っておいたら争うけれども、私たちの文明の力で、それを押しとどめることができるはずである、皆さん、そういう方向に向けて頑張りましょう、ということでした。

アメリカのペンタゴンでは研究プロジェクトがいくつもあって、その中には戦争の要因を探るプロジェクトもあります。そこで、研究者が考古学や人類学などの成果を集めて分析した結果、やはり人類はずっと戦争をしているみたいで、戦争は人類にとっては本性のようなものだというような報告を上げたようです。オバマ大統領の演説は、そうした根拠に基づくものでした。

しかし、これは果たして本当でしょうか。ここは非常に重要なところです。17 世紀の哲学者ホッブズ（Thomas Hobbes）は、当然考古学的なデータは知りませんので、完全な哲学的な思考として人の自然状態は闘争状態のはずだと考えました。なぜかというと、自己保存、つまり自分が死なないようにすることが全ての生物の一番大事なところであって、さらに人間は将来を予見する理性があるので、常にこの先どうなるのかということを考える。そうすると、常に自己保存のために他者より優位に立とうとする。そして、限られた資源を未来の自己保存のために所有する。だから、もっと欲しい、もっと持っておかないと安心できないということになるので、放っておくと闘争状態になるというふうに考えたわけです。これが正しいとすれば、ヒトは戦うものであるとなってしまって、なぜヒトは戦うのかを考える意義がなくなってしまいます。

これに対して、日本の考古学者の佐原眞さんは、人類の歴史 300 万年を 3 メートルとすると、日本の場合は最後

受傷人骨の比率

縄文	総数	成人	受傷人骨	暴力による死亡率 総数 (%)	暴力による死亡率 成人 (%)
早期	113	39	1	0.09%	2.56%
前期	216	118	0	0.00%	0.00%
中期	371	172	5	1.35%	2.90%
後期	944	472	7	0.74%	1.48%
晩期	932	471	10	1.07%	2.12%
合計	2576	1272	23	0.89%	1.81%

弥生	総数	成人	受傷人骨	暴力による死亡率 総数 (%)	暴力による死亡率 成人 (%)
早期	27	25	6	22.22%	24.00%
前期	233	156	7	3.00%	4.49%
中期	2347	1794	70	2.98%	3.68%
後期	691	420	17	2.46%	4.05%
合計	3298	2395	100	3.03%	4.01%

Nakao et al. 2016. Nakagawa et al. 2017

図 4　縄文時代と弥生時代の受傷人骨の比率

の３ミリで戦争が始まっている。なので、殺し合うことは本能ではない。戦争は最近つくり出したものだから、必ず捨てることができるということをおっしゃいました。

また、霊長類学者の山極壽一さんも、人が生来暴力的とする考え方を否定しています。チンパンジーは非常に暴力的で、同じチンパンジーが死ぬまで暴力を振るったりすることがあります。人間とチンパンジーというのは一番近縁な種なので、チンパンジーが暴力的なのだから、人間も暴力的なはずである。だから、人間の本能の中にそのような暴力性が入っているのだという言い方もよくされます。しかし、チンパンジーと近縁のボノボという種類がいるのです。人間の祖先とチンパンジーの祖先が 700 万年前ぐらいに分かれますが、そのあとでチンパンジーとボノボが別の種類に分かれたのです。そしてチンパンジーは確かに攻撃的なのですが、ボノボは攻撃的ではないのです。そうすると、攻撃性というのはわりと短期間のうちに進化するもののようで、今世界中ではいろいろな戦争や内紛が起こっていますが、それがずっと昔から人間が持っている本性によるものかというと、そうでもないということを山極さんは言っておられます。

この問題に関して、経済学者のサミュエル・ボウルズ（Samuel Bowles）さんという人を中心に、最近非常に影響力の強い説が提案されました。考古学のデータも参照しつつシミュレーション研究を行って、人の利他性がなぜ進化したのかを検討しました。他人が困っていたら助けたくなる本能を人は特徴的に持っています。心理学の研究などで、生まれて間もないころから、ヒトはそういう性質を持っているということが分かっています。自分が多少不利益を被っても、他の人を助けたくなるような、あるいは人と協力して何かをすることに喜びを感じるような、そういう性質です。

この利他性が、なぜ進化したのかということは、実は人類史の謎です。というのも、先ほどのホッブス説のように、本来は生物としては自分が生き残ることが一番大事なはずなのです。なのに、自分を犠牲にしてヒトを助ける性質というのは進化するはずがないと言われているのです。自分を犠牲にするような人は死んでしまう確率が高くなるのでその人の遺伝子は残りにくく、ヒトを助けたくなるような性質は進化しないはずだということなのです。

ボウルズさんは、集団対立つまり集団間の戦争が非常に頻繁にあるような条件であれば、人のために自分を犠牲にして戦うような人がたくさんいる集団の方が強くなり、そういう集団が生き残るはずと考えたのです。つまり、戦争をするということと、ヒトと助け合うということがセットでヒトの本質なのだということになるわけです。果たしてそうなのでしょうか。

この説が成立するには、旧石器時代に集団間の戦争が多発していないといけません。ボウルズさんは、考古学的に発掘調査で出土した人骨の中に殺された人が平均で 14％はいたというデータを持ってきて、戦争は頻繁であったと想定したのですが、そのデータには非常に偏りがあります。そこで、縄文時代の出土人骨で、実際にどのぐらい受傷痕跡があるかを調べてみると、時期によって、多少ばらつきはあるのですが、だいたい全体で見ると１％弱です（図４）。成人だけで見ても２％弱です。

弥生時代になると、受傷人骨の割合は増えて、全体で見ると３％、大人だけだと４％になります。これが示しているのは、先ほど述べた佐原説のように、日本列島の場合は戦争が顕著に見えるようになるのは弥生時代になってから、つまり農耕が本格的に始まって、対人用の武器が発達する時代になってからだといえます。

ただ、この研究論文が出たときに「縄文時代は平和だった」という見出しで報道されたりしたのですけれども、受傷人骨が１％ということは 100 人に１人が暴力を受けているということになりますので、平和な状況の現代社会に比べれば高いです。現在は非常に人口の母数が多いことと、やはり他者に対する暴力というものが、社会的な「法律」や「教育」などで抑制されているからでしょう。ただし、戦争になると一度に数千人、数万人が死ぬが今の社会です。

また、縄文時代だけがとりわけ暴力による死者数が少ないわけではありません。ウィスコンシン大学とイリノイ大学のマーク・キッセル（Marc Kissel）さんとマシュー・ピシテリ (Matthew Piscitelli) さんが、世界中の１万年以上前のほぼ旧石器時代の人骨について調べたところ、やはり傷を受けているヒトは２％に過ぎないということがわかりました。こうした人骨データからすると、ボウルズが考えるような、旧石器時代からヒトは戦争をしまくっていたというモデルは、どうも成立しないということになります。

今、戦争をいかに終わらせるか、そして次の戦争をいかに抑えるかということは、現代の世界を維持するうえで非常に重要です。この視点から、文明動態学研究所は今年度２回のオンラインシンポジウムを開催しました（図５）。確かに自分を犠牲にして人を助けるような性質がなければ戦争というものは起きません。軍隊というものが成立しな

いので。ですから人の協調する力と戦争をする力とが密接に結び付いていることは確かなのです。けれども、戦争ができる力をいかに抑えるかということも、歴史の中で発達してきているということも見えてくるのです。大きな枠としてのコミュニケーションの一部として、ときに破壊的な戦争が起きるのだというふうに捉えると、そうならないかたちのコミュニケーションを発展させるにはどうしたらいいかという問いを立てることができます。

文明動態学が取組む研究テーマの具体的な例として戦争の話をしました。心理学や霊長類学のなど、多くの分野で検討することで初めて戦争というものがいったい何なのかということが見えてきます。このような分野横断的な研究をこれからも続けていきたいというふうに思っております。

また、文理融合的な研究も、この文明動態学研究所が力を入れて進めていこうとしているものの一つです。いろいろな手法を使うことで、過去の実態についてこれまでわからなかったことがいろいろと見えてきます。思い込みで過去の資料を見てしまうと、どうしても自分たちが見たいものしか見えないことがあります。さまざまな理化学的な分析が可能になってきたことで、思いも寄らない事実がわかるようになってきています。

今日は、このあと飯塚義之先生に、石の化学分析の話をしてもらいます。ちょっと、それにつなげる前振り的なお話をしたいと思います。例えば、ヒスイなどの緑色のきれいな石を使って、装身具をつくることをヒトはしばしばやります。この、自分の身を飾るという行動は、極めてホモ・サピエンス的というか、現生人類的な行動なのです。

なかなか面白いのですが、ヒトが最初にアクセサリーとして使い始めたのは、小さい巻き貝です。今から８万2000年前の最古級の資料が比較的最近見つかりました。小さい巻き貝の貝殻を集めて、それに穴を開けて、ひもを通して、それを身に着けるわけです。それによって、自分が何者かということを他の人に示したりするようになったわけです。ロシアのスンギールというところで発見された埋葬人骨は、象牙でつくったビーズを大量に身に着けていました。この旧石器時代のヒトたち、いわゆる文明形成の前のヒトたちは、身を飾る装身具をつくるのに、基本的に他の生き物の一部を使うわけです。貝とか、象の牙とか、あるいは骨とか、動物の歯とかそういうものを使います。

それはやはり自分たちと他の生き物との関係性が非常に深いからかもしれません。他の生き物の一部を身に着けることで、そのものとの関係性をつくるような、自然の中で

図５　戦争に関する学際的研究成果のアウトリーチ

生きていく彼らならではの世界観、その中で生まれてくる装身具づくりというものがあったと思います。ところが、いわゆる文明形成期といいますか、ちょうど農耕や定住が始まるころになると、緑色の石ががぜん人気になるのです。それまでも、緑色の石自体はずっと環境の中にあったはずですが、使うことはなかったわけです。それが、中東では定住的な狩猟採集社会である後期ナトゥーフ文化になると、緑色の石を使った装身具をつくり始めます。定住的で狩猟採集ベースというところは縄文と似ています。

中国でも、緑色の石を使って、竜のかたちをしたオブジェクトなどをつくり始めます。日本列島でも、縄文時代の前期の終わりぐらいから、緑色の石を使って玉をつくり始めるわけです。そして、メソアメリカでも、緑色の石を使った装身具や造形物をつくり始めます。これは、とても面白いことだと思います。

いわゆる文明に歩み出すときに装身具をつくる素材が変わるのです。しかも、先ほど言いましたように、アメリカに渡っていったヒトと、ユーラシア側に残ったヒトは、その後に直接的な交渉はないので、緑色の石を使う文化が伝播していったということではないのです。社会が複雑化してくると緑色の石が人気になるという現象が、それぞれ独立して発生しています。

その後、この数百年ぐらいは価値の基本として、例えば金本位制のように、金や銀などの貴金属が人類の価値のベースになる物質になっていますが、動物の歯とか牙が主流だった時代と、今の金銀の間に、緑色の石の時代というのがあるようです。どうも、このときにヒトの世界観とか、考え方みたいなものがかなり変わりはじめたのではないかという気がいたします。

ただ、同じ緑色の石といってもさまざまな石材があって、肉眼だけではその石が何なのか、どこで採れる石なのか判

断が難しいものです。装身具や装飾品というのは、ある場所から別の場所へ、集団から集団へと交換や交易で移動することがあります。その実態を解明することは、歴史の一端を明らかにするうえで重要ですが、なかなか目で見ただけではよくわからないのです。

理化学的な手法で分析することで、この緑色の石の時代の実態がいろいろとわかってきます。私もこのあとの飯塚先生の発表を、大変楽しみにしております。

以上、簡単ではありますが、文明動態学が目指すものというテーマでお話させていただきました。ありがとうございました。

参考文献

Hisashi Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Nakagawa, T., Matsumoto, N., Matsugi、T. (2016). Violence in the prehistoric period of Japan: the spatio-temporal pattern of skeletal evidence for violence in the Jomon period. Biology Letters, 12(3). https://doi.org/10.1098/rsbl.2016.0028

松本直子 2016「装身具の象徴的意味とその変化に関する鳥瞰的予察」『玉文化研究』第２号　日本玉文化学会　1-8 頁

松本直子 2017「人類史における戦争の位置づけ」2017 年 6 月『現代思想』2017 年 6 月号、162-174 頁

松本直子 2018「狩猟採集社会における戦争―集団間の暴力を促進／抑制する要因について考える―」『考古学研究』65(3)、22 － 36 頁

Matsumoto, N., Sugiyama, S., and Garcia-Des Lauriers, C. (Eds.) (2021). Landscape, Monuments, Arts, and Rituals Out of Eurasia in Bio-Cultural Perspectives. Proceedings of an International Conference in Mexico, February 27-28, 2020. Research Institute for the Dynamics of Civilizations, Okayama University.

松本直子・入來篤史　2021「文明形成を捉えなおすために―従来の文明論の対象を超えた新たな概念・領域設定による研究展開の可能性」『科学』Feb. 2021 Vol.91 No.2: 159-163.

松本直子編　2022『心とアートの人類史』季刊考古学・別冊 36、松本直子編、雄山閣